

〈私の研究〉

「古字書と新辞典」

佐藤 進

私の研究は、中国の古い字書の文献学的研究を行うこと、またそれに並行して、中国の古典を読むために役立つ辞典を編集することのふたつである。

学部の卒業論文と大学院の修士論文は、語義を発音との連関で説明しようとした漢代の劉熙『釈名』で書いた。それが中国の古字書を研究対象にしたスタートである。

まもなく、富山大学に新設の中国文学専攻に招かれ、その後十三年間は基礎的な古典の読解に磨きをかけることにあてた。一方、当時同僚であった現代中国語研究の相原茂氏とともに、雑誌『中国語文』所収論文の紹介を月刊『言語』に掲載する仕事を十数年にわたって行ない、それを通じて語学的なセンスを蓄積するのに役に立った。

東京に舞い戻ったあと、かつてマンツーマンで古典の読み方を教わった戸川芳郎先生からご連絡があり、三省堂書店から古漢語の字書を出すことになっているので手伝ってほしいとのことであった。元来が辞書好きであって、しかも日本の漢和辞典には引いてありが

たいと思うようなものがないと感じていたわけであるから、一も二もなく承諾した。それが一九九二年の春のことであって、『漢辞海』を産み出すきっかけであった。

この辞書では、本邦初になる試みをいくつも盛りこんだ。それは決して販売目的の特色作りなどではなく、自分が使うならこの辞書にはこの機能がほしいと願うことを盛りこんだ結果である。いくつか例をあげてみよう。

まず親字は、徹底して品詞を基準に分類した。ここまで品詞分類を徹底した漢和辞典はない。ただ、その品詞記述はあくまで古代漢語の文法にのっとったものであるから、一見なじまないもの、違和感があるものがある。そもそも日本語には状態を表わす形容詞が少ないにもかかわらず、中国語には古代も現代もそれが多用されるので、そのギャップはいかんともしがたい。たとえば「乱」には形容詞として「秩序のないさま」、「乱雑」の「乱」の語義があるが、日本ではそれにあたる形容詞が見つけれられず、動詞の「みだる」を充てざるを得なかった。そこで『漢辞海』では、形容詞という品詞記述をする一方、「訓読では動詞で読む」という注記をおこない、彼我のとらえかたの差異を明示した。

日本漢字音にいたっては、明治以来どの字典も準拠してきた本居宣長の「字音仮名遣い」を廃して、江戸初期以前の漢字音表記を注記した。たとえば、「玄関」という言葉は「仏道に入る黒い門」が原義であるが、同義語に「幽関」という語もあった。しかし「玄関」が優勢な語として今日に伝わったのは、これが韻母の調和を実現した畳韻語であったからである。しかるに、宣長の字音仮名遣いでは

「ゲン・クワン」となってそのことが見えてこない。『漢辞海』の字音表記ではこれが「グエン・クエン」となり、畳韻語であることが如実に見えてくるのである。実は、『漢辞海』が世に出た後で改訂が行なわれたある有名漢和辞典がこの表記を何の断りもなしに取り入れているのを知って、ひそかに苦笑したことであった。明治百年の殻を打ち破るにはそれ相当の勇氣と苦勞をとまったのであるが、そこにはそういう葛藤の形跡すら見られなかった。

ほかにも、新機軸は枚挙に暇がないが、いまはこの秋に出る予定の改訂版を見てほしいと言うだけに止どめる。特に、今度は熟語項目のすべてにわたって、もう一度出典に当たりなおして語義を確認した。『大漢和辞典』はおろか『漢語大詞典』の誤りをも訂し得た箇所は随所にある。共編者の濱口富士雄氏ともども、編者がみずからすみずみまで検討するような辞典は決して多くはないはずで、出来の程はともかく、その点は我々の自負するところである。

『漢辞海』を編集するかたわら、ほぼ同じ時期に研究を重ねてきたのは、漢の揚雄の『方言』の研究である。これについてはもともと多少の下準備はあったが、深く傾斜するようになったのは青山学院大学の遠藤光暁氏らと研究会を行なうことになったのが発端である。

それ以前には現代方言のデータベースを作ろうと、当時静岡大学の岩田礼氏・京都大学の平田晶司氏らと共同研究を行っていた（もっとも現代方言プロパーではない私は、オリジナルのデータベースシステムを作るプログラマーとして参加していた）。その科

研プロジェクトの延長で、揚雄『方言』を研究対象にした科研共同研究が始まったのである。

その皮切りに概説を行ない、後に活字にしたのが「揚雄『方言』研究導論」（東方書店『現代中国語学への視座』一九九八年）である。私の『方言』研究の主軸は二本あり、一本は天壤間の孤本である宋刊『方言』の版本研究であり、もう一本は乾隆嘉慶期の清儒の『方言』研究を研究することである。

宋刊『方言』については、これが二百五十年ぶりに再発見された時に作成されたコロタイプ版に比べて、四部叢刊版がいかに劣るかを指摘し、静嘉堂文庫に残る写本がいかに貴重であるかなどを論じた。その成果の一つとして、コロタイプ版・四部叢刊版・静嘉堂文庫写本、それに翻刻本の一つである王懿榮の天壤閣刻本の四種を同頁で対照できるように並べた集成本がある（非売品の科研報告書）。これは中国でも高く評価され、今年になって中華書局から改めて刊行したいという申し出がある。

清儒の『方言』研究についての研究は、戴震『方言疏證』所引古籍の版本研究と、盧文弨『重校方言』所引宋刊本についての研究が主である。後者の引く宋刊本が、実は静嘉堂文庫所蔵の写本にはかならないことが立証できたのは、いささか得意の論であった。

『方言』研究では前後十編ほどの論文を書き連ねてきた。そろそろこれを単行本にまとめるのが責務であろうかと考えている。